

ミステリ読書案内

2019. 12. 19 発行元

第19号 伊藤 剛

「ミステリマガジン」の思い出

私の蔵書の一の中核をなす『ミステリマガジン』。約500冊ある。42年間か。私のミステリ読書と一緒に歩んできた雑誌と言えるだろう。第10号に書いた『幻影城』と同様に、少し紹介してみようと思う。

「ミステリマガジン」とは？

『ハヤカワ・ミステリ・マガジン』=HMMの歴史は古い。1956年7月に『エラリー・クイーンズ・ミステリ・マガジン日本語版』としてスタートした。

1966年に『ハヤカワ・ミステリ・マガジン』になり、現在まで続いている。ただ、2015年5月号から隔月刊となり、雑誌としての経営はかなり苦しくなっている現状ではないかと推測される。

2019年11月号が通算第737号で、発行のペースは随分ゆっくりになった。しかし、日本のミステリ専門誌としては貴重な存在であり、何とかこれからも続いてほしいと願うものである。

ミステリ小説を読む…？

私が買い始めた大学生の頃は、真面目にチェックをして、長編分載も欠かさず読むようにしていたが、間もなくやめた。長編は本になってから一気に読むのがよい。雑誌の次の発行日を待つなどということは、とてもしていらなかった。

短編の方は、好きな作家だけを選んで目を通していった。が、それも間もなくやめた。やはり、私にとって月刊雑誌は「小説を読む本」としては認識できないのだ。

本当に気に入った箇所を拾い読み。楢喜八さんの挿絵につられて1ページだけ部分読み。そんな活用の仕方だった。

“情報源”として読むが第一

私にとっての雑誌の意義の第一は“情報源”である。最初に見るのが、まず広告。ポケミス、ミステリ文庫、そして単行本。当時は、ロバート・B・パーカーなどは出るとすぐ買っていたので、新刊広告を楽しみにしていた。

そしてポケミスの再刊を心待ちにしていた。絶版になっている本が時々「ベスト・コレクション」と銘打って出てくるのが嬉しかった。有り難かった。早川書房以外の出版社の広告や情報も楽しみにしていた。

ミステリではないけれども、SFの方の『宇宙英雄ロードン・シリーズ』が570冊を越えたことなどを見るのも楽しい。

マンガやカット・イラストなどには必ず目を通す。私は絵が特に好きなのだ。そして、意外にも最初に読むのが「読者の声・響きと怒り」や「編集後記」。簡単に読めるところが良いのだと思う。

“書評”はあまり当てにしない

反面、さらっと流すのが「書評コーナー」。私は、「書評」をあまり当てにしていない。取り上げられた本の題名と作者名は見るけれども、中味の文章はちらっとしか読まないことにしている。自分で読んで、自分の受け止め方を大切にしたいと思っているから。私がほしいのは、その期間に発行されたミステリ本全部の「発刊リスト」。

この『読書案内』のような「書評」めいた文章を書いているのに、「変じやないか」と非難されるかもしれないが、他者の“お薦め”が、どうも自分の感覚とぴったり来ないと思うことが多いのだ。すみません。我儘で…。

「雑誌」というもの。何度も繰り返し手に取り、手触りを楽しみ、当てもなくあちこちのページを捲り、ミステリという自分の好きな世界をさ迷い歩く。そんなものだと思う。こんな楽しみ方は電子書籍にはできないこと。本棚にずらりと500冊並ぶ姿も満足感を与える。これも電子書籍にはできないこと。本当に『ミステリ・マガジン』様々だ。

海外ミステリ この1冊・連載9

F・ブラウン『シカゴ・ブルース』

今回はフレデリック・ブラウンの『シカゴ・ブルース』。私が持っているのは創元推理文庫版。(『わが街シカゴ』の題名で別出版社(たぶんポケミス)からも出ている) フレデリック・ブラウンはアメリカのサスペンス・ミステリの書き手。1906年生まれで、1947年の本書が処女長編。エドガー賞受賞作品。父親を殺されたエド・ハンターが伯父のウォレスと協力して犯人を捜す物語。名探偵は登場せず、地道な調査に一喜一憂しながら真実を見つけ出すパターン。背景となるシカゴという街が大きなポイントになっている。宝島社発行の『このミステリーがすごい! 2013年版』の「特集・復刊希望ベストテン・海外編」に挙げられている一作なので、傑作と言えよう。本が手に入るようなら、是非お勧め。

エド・ハンター・ミステリは、このあと『三人の小人』『月夜の狼』『死に至る火星人の扉』『消された男』『パパが殺される!』(いずれも創元推理文庫)と続いていく。いずれも奇抜なアイデアで、読みやすく、テンポよく話は進んでいく。私は、学生時代に全部読んでしまった。